

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

テレビに期待～今だからこそ襟を正して

テレビ業界の不祥事記事が目立っている。某テレビ局関係者が女性に暴行事件を起こし、厳しい実刑判決...なんて記事は言語道断、全くお話にならない。某局プロデューサーが視聴率稼ぎに不正行為をした、なんて話も実に幼稚で、卑劣で...ご本人のことは何も存じ上げない小生といえども、微塵も「同情の余地なし」と申し上げていいかもしれない。石原東京都知事が「訴えてやる」なんて記事も最近目にした。以前からたまに、いわゆる「やらせ事件」なるものは、その都度報道されてきた。何をもって「やらせ」というかは、業界人に言わせれば色々あるらしい。面白がってテレビを見ている末端の我々視聴者から言えば、こよなくテレビを愛し、ただひたすらテレビを信じているだけの話である。

決して「誤報」とは言わないが、この間の総選挙の予想は、各局ともそろって、酷かった。我々同様、ただひたすらテレビを信じていた某野党の偉い人のコメント、実に間抜けで、哀れに思えて、今となっては逆に、親しみすら感じる始末である。あの人のコメントの内容が、時間を追って変わっていき、その顔色と引きつった表情がやはり時間ごとに変化した状況を、テレビは皮肉にも、そのままアップで全国に映し続けていた。選挙の結果予測ゆえ、「それでいいのだ、刻々と情勢は変わり、それに合わせたコメントゆえ、変わるの当たり前」。それでも何故か、「悲哀」を感じざるを得なかったのは、やはりテレビの「出口調査」と称する予測データに起因しているに違いない。あの人はもっともっと、カッコいいのが似合っている。

ど素人が言ってる的違いかもしれないが、あれほど、2大政党型の選挙が予測された中で、出口調査の修正手法も、従前の方法とは違わなければならないはず。にもかかわらず、従来と同じ手法で予測値を算出かの如く、見事に違っていたようである。

日本人はテレビ大好きである。従ってテレビの影響は底知れず大きく、テレビに対する信頼度も、欧米とは比較にならないほど、極めて高いものがある。全国民の期待を一身に担っているテレビ関係者の皆様、是非、報道陣としての哲学とプライドを持って頂きたい。たとえわずか1回でも、微々たる事といえども、間違いは許されない世界、そんな職業倫理を背負いながら、素晴らしい業務に邁進して頂きたい。

テレビという媒体は、ある意味では世論も創る、国民の教養の醸成機能すら保持し得る。国民生活のみならず、政治、経済、文化、教育、その他多くの部分、最大のオピニオンリーダーとしての役割を果たすといっても過言でない。それだけ大きな存在であるからこそ、自ら常に、襟を正し、全国民を、美しき日本、素晴らしき日本、豊かな日本、そして希望ある日本に導いていただきたい。